



俺たちは根っからの漁師で、生まれる前から船に乗っていたから、ニシン船は「ゆりかご」みたいなもんだ。

昔はニシン漁が始まる頃になると、いろんな所からやん衆が稼ぎにやって来る。多くは松前や白老、遠くは青森からも来たもんだ。やん衆には山の男や女（農家に人）、兵隊さんも多かったが、中には網走の監獄から出て来た凶悪犯で、刑を終えたばかりの奴らもいた。恐かったね。何されるか分からないから、用心に用心を重ねた。夜は「じよっピン」かつたし、一人歩きなんかできるもんでなかった。当時は稼ぎに応じてニシンを運ぶ「モッコ」に入れて、一つ、二つ、三つと出面賃の代わりに持って行ってもらった。身の周りの物を甲子に入れて長く居る奴もいれば、近場から馬車に乗り合いで来て、その日にニシンを持って帰って行く奴もいた。帰る時は、顔いっぱい笑顔で帰って行ったもんだ。その笑顔が今でも思い浮かぶな。

その頃捕れたニシンはサハリン沖のものでしたが、今は海が変わって石狩湾系のニシンが多くなっている。俺たちの生活は取れて何ほの世界だから、漁しだいで酒の

春告魚

俺たちや、おっちゃんよりも心の内を知ってるよ



左から谷澤松澤、浜谷飛鳥、一見夫、浩二さん

1998.3 浜に活気

留萌に 鯨 が帰ってきた



量も変わるんだ。だから、昨年にも続き今年もニシン様様でありがたいことだ。昔のニシン漁は、建網にのったニシンを起すため、10名から20名ほど乗り込む「越船」と2、3名が乗り込んで、ニシンを袋にのった網に移す「棹船」の二隻でやっていった。その他には、沖で漁をしてる船に物資や食料を運ぶ「伝馬船」もあった。

当時の棹船の上には、小さな小屋みたいもんを取り付けて、その中に大船頭が入り、網につないだ糸を握りながらニシンがその糸に触る感触が入ったニシンの漁を判断する。少なくともだめだが、入り過ぎると網を揚げられなくなるから、その判断が難しい。そして、大船頭の一声で漁夫たちが一斉に網をたぐり寄せていく。漁の多い時は夜も沖でニシンを待つことがある。



歌ったのが「沖あげ音頭」で、今でもこの歌を保存している人がいる。この歌を思い出すが、昔のニシン漁で沸いた様子が走馬灯のように甦ってくるよ。当時は沖で歌う声の大きさを、漁模様がわかったもんだ。小さい頃は学校に行きたくなくて、漁を良く手伝ったもんだ。ニシン漁がないときは昆布やタコ取りをしていた。なんせ、船に乗っていれば良か



浜谷 浩一さん
64歳 40年
年 漁師歴
A B 型

ったしな。でも、小さい頃、親父につれられて漁に行ったときの話ですが、昔は、瀬越し沖でもクジラがよく潮を噴いていた。船より大きいクジラが潜水艦みていに「ぬー」と姿を見せたときは、腰が抜けそうになるくらい、びっくりました。恐かかったなあ。俺なんか、150キロから200キロもある、サメを捕まえたこともあった。その巨体をあげるのに何時間もかかったが、驚いたことに「えさ」に付けた大きな浮子



松澤 晃さん
64歳 45年
年 漁師歴
A B 型

をそのまんま引つ張りながら、海の中に消えてしまったことだ。すごい力だった。前に人や船を襲うサメの映画があったが、そんなうなもんだ。クジラと言え、俺の叔父たちがクジラに助けられたことがあったと言っていたなあ。当時ニシン漁で沸いていた頃、その日も何曹もの船が沖でニシンを捕っていた。その日も大漁で親父たちの船はいつものとおり、取

れたニシンを棹船に垂らした網の中にニシンを入れる作業をしていた。その時、一頭のクジラが叔父たちの網めがけて突っ込んできた。一杯になった網が垂れ下がっているため、船ごとひっくりかえされるようになった。とっさの判断で網を「なた」で切離し難を逃れた。しばらくほーっとしていたが、仕方なく漁をあきらめ丘に戻った



浜谷 隆夫さん
63歳 45年
年 漁師歴
A B 型

ときだった。ゴーっと言う音とともに風が吹き荒れ、海は大シケと化してしまった。沖で漁を続けていた仲間たちの船が、次々と荒れ狂う海に吞まれていった。助け船を出すこともできず、丘から「おーいっ、おーいっ、大丈夫かーっ」と、何度も何度も繰り返すだけが精一杯だった。そばで、泣きじゃくる妻や子たちを見るのが忍びなかったが、どうしようもなかった。

それ以来親父はクジラを食うのをやめたし、毎年その日が来ると、海に手を合わしていた。俺たちもシケに遭い、帰るに帰れないときは碇をある。そんなときは碇をブチ込んで、シケが治まるのをじっとしのぐ時もあるし、漁統きで疲れてしまいい、眠気で船から落ちて、死を覚悟したときもある。「あぶねー。あぶねー。板子一枚、下は地獄」とよく言ったもんだ。日本海の荒波じゃ、船は



飛鳥 弦二さん
58歳 35年
年 漁師歴
O 型

「こっぴたいいなもんだからな。今年の3月はじめに取れたニシンは4年もので大きかった。数珠つなぎのように上がってきたニシンで、船は一杯になったし、箱で200以上あった。群衆再来ってとこだな。網を刺す場所と判断は長年の勘だけが頼りだが、網の目の大きさも問題だ。網の目が大きすぎると抜けてしまいうし、小さいとかわらない。海、空、風の動きと、ニシンとの駆け引きが、漁を

決める。それと、昔のニシン漁を再現した「やん衆どすこほい祭り」は、若いもんだが一生懸命やってる。いろいろと大変だと思いが、その祭りのお陰かもしんねーな。ちようど、大漁だった日はこの祭りが開かれていたときだったし、みんなに感謝してるよ。春の船出はやっぱいいし、留萌はニシンが似合うよ。